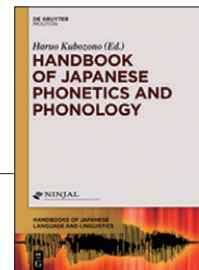


**著書紹介** Handbooks of Japanese Language  
and Linguistics 2 Handbook of Japanese  
Phonetics and Phonology Haruo Kubozono (ed.)

著者	窪園 晴夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	6
号	2
ページ	52-53
発行年	2015-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000788">http://doi.org/10.15084/00000788</a>

Handbooks of Japanese Language and Linguistics 2  
***Handbook of Japanese Phonetics and Phonology***  
Haruo Kubozono (ed.)

Masayoshi Shibatani, Taro Kageyama (series editors)  
De Gruyter Mouton, February 2015. xl, 767 pages.



窪菌 晴夫

本書は国語研の企画による Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ(全12巻)の一卷として編集・刊行されたものである。このシリーズは、日本語を中心とする日本の言語に関するこれまでの研究を総合的に解説し、日本語研究および一般言語学の発展に資するという目標を持っている。本書も、これまで海外に知られていなかった日本の優れた研究を含め、日本語に関する研究を海外に発信することを念頭に、日本語を内からと外からの両面から考察し、日本語以外の言語や一般言語学・言語理論の研究者(および研究者の卵)にも日本語の構造が正しく理解してもらえることを目指した。

本書は現代日本語の中でもとりわけ標準語に焦点を当て、その音声構造、音韻構造を網羅的に記述することを目標としている。過去百年間の優れた研究を俯瞰するだけでなく、必要に応じて最適性理論などの最新の音韻理論にも言及し、またそれぞれのテーマについて今後に残された研究課題も紹介した。これらの目標を達成するために、本書は5つのパート(I Introduction to Japanese phonetics and phonology, II Segmental phonetics and phonology, III Morphophonology, IV Prosody, V Broader perspectives)から構成されている。合計19の章を担当する執筆陣(16名)は、それぞれのテーマにおいて顕著な業績を収めている研究者であり、その大半は国語研の共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」の共同研究員である(その意味において、このプロジェクトの研究成果を報告したものと言える)。

各パートに収められた章および執筆者は下記のとおりである。

- I. Introduction to Japanese Phonetics and Phonology: Haruo Kubozono
- II. Segmental Phonetics and Phonology
  - 1. The phonetics of *sokuon*, or geminate obstruents: Shigeto Kawahara
  - 2. The phonology of *sokuon*, or geminate obstruents: Itsue Kawagoe
  - 3. The emergence of new consonant contrasts: Pintér Gábor
  - 4. Vowel devoicing: Masako Fujimoto
  - 5. Diphthongs and vowel coalescence: Haruo Kubozono
- III. Morphophonology
  - 6. The phonological lexicon and mimetic phonology: Akio Nasu
  - 7. Sino-Japanese phonology: Junko Ito & Armin Mester
  - 8. Loanword phonology: Haruo Kubozono
  - 9. Word formation and phonological processes: Junko Ito & Armin Mester

10. Rendaku: Timothy J. Vance
- IV. Prosody
11. The phonology of Japanese accent: Shigeto Kawahara
12. Mora and mora-timing: Takashi Otake
13. Intonation: Yosuke Igarashi
14. Syntax-phonology interface: Shinichiro Ishihara
- V. Broader Perspectives
15. Historical phonology: Tomoaki Takayama
16. Corpus-based phonetics: Kikuo Maekawa
17. L1 Phonology: phonological development: Mitsuhiko Ota
18. L2 phonetics and phonology: Yukari Hirata

この目次からもわかるように、本書はドメインの小さな音声現象から大きな音声現象へと分析が進むように構成されている。まずパート II においては、促音や新しい子音、母音の無声化、二重母音といった「分節音」(segmental phonetics/phonology)の現象を扱った。ここでは、分節音より小さな単位である「音声素性」(phonetic feature)を用いた分析も紹介している。パート III では分節音が結合して作られる「形態素」と「語」を対象を広げ、語種(和語、漢語、外来語、オノマトペ)ごとの構造と、語が結合する際に見られる現象(複合語アクセント、連濁等)を考察した。パート IV はさらにドメインを広げ、語や文に見られる「プロソディー」の現象を分析した。具体的には、語のアクセント、モーラリズム、文のイントネーション、イントネーションに見られる音韻構造と他の構造(統語構造、情報構造)との関係などである。最後にパート V では、日本語の音声・音韻構造を多角的に考察するために、歴史音韻論、コーパス言語学、第一言語獲得(L1)、第二言語習得(L2)という4つの独立した視点からの分析を展開している。

本書は母音からイントネーションまで、現代日本語(標準語)のすべての主要な現象をカバーしており、日本語音声学・音韻論に関する専門的な解説書・研究書としては過去最大規模のものである。本書の刊行を契機として、一方では日本語の研究が世界の言語研究に貢献し、他方では世界の言語研究から日本語の分析に新たな知見が得られることを期待している。

### 窪 蘭 晴夫 (くぼその・はるお)

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph.D.(言語学)(エジンバラ大学)。南山大学助教授、大阪外国語大学助教授、神戸大学教授を経て2010年4月より現職。

主な著書・論文: *The organization of Japanese prosody* (くろしお出版, 1993), 『語形成と音韻構造』(くろしお出版, 1995), 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー118, 岩波書店, 2006), *Varieties of pitch accent systems in Japanese* (*Lingua* 122, 2012), *Japanese word accent* (*Oxford Bibliographies Online*, Oxford University Press, online, 2013).

受賞: 市河賞(財団法人語学教育研究所, 1995), 金田一京助博士記念賞(金田一京助博士記念会, 1997).

社会活動: 日本言語学会会長, 日本音声学会理事・企画委員長・評議員, 日本学術会議連携会員。